

赤十字 NEWS

SEPTEMBER 2019
NO.952

9

令和元年9月1日(毎月1日発行)
赤十字新聞 第952号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

<http://www.jrc.or.jp>

第47回 フローレンス・ナイチンゲール記章授与式



看護の力を未来へ

ナイチンゲール記章

看護活動の向上に献身し、顕著な功労を残した看護師らに送られる、世界最高峰のフローレンス・ナイチンゲール記章。第47回となる今年も、日本から日本赤十字社看護師同方会理事長の竹下喜久子さんをはじめ2名が受章し、名誉総裁の皇后陛下より記章を授与されました。

(関連記事 p.4)

CONTENTS

FEATURE__2・3

大災害で被災したら…

TOPICS__4

第47回フローレンス・ナイチンゲール記章授与式

TOPICS__5

日本赤十字看護大学
さいたま看護学部 開設

赤井十子さんの
ワクワク赤十字体験!
「手足に障がいのある方
の義肢と装具を作るお仕事」

AREA NEWS__6・7

福島/新潟/群馬/新潟/長野/
愛知/北海道/千葉/京都/東京

健康豆知識「気象病」

WORLD NEWS__8

バングラデシュ南部避難民
1枚の写真から
「夢を取り戻した少年」



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室
〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
TEL: 03-3438-1311
一部 20 円
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society

今こそ知っておきたい緊急時の避難所生活

大災害で、被災したら...

9月1日は
防災の日

毎年9月1日は「防災の日」。そして、その日を中心とする1週間が防災週間です。避難訓練への参加や、過去の災害を振り返る報道や展示などに触れる機会も多い時期ですが、実際に被災した経験がなければ、発災後に自分や家族の身に何が起るか、考えられる方は少ないかもしれません。いつ起こるとも知れない大災害。災害への備えとして、被災者の体験を想像力を働かせて読み、避難所生活を「追体験」してみましょう。

「応急対応に従事する地域の防災リーダーの育成を目的とした研修カリキュラムの研究」(富士常葉大学大学院環境防災研究科 白土直樹)を一部改編



追体験
1

指定の避難所に入れなかったり、毛布などの備蓄品が足りないことも...

「私が避難所に着いた午後3時ごろはまだガラガラでしたけど、晚にはいっぱいになり、入れなかった人もいました。学校の体操マットを広げたり潰れた家から持ってきた布団を敷いたりでもうぎゅうぎゅう。まるで修学旅行のゴッパ寝です。多分200人ぐらいいたと思いますけど、毛布が40枚しかないって言ってました。それでもお年寄りから順番に渡るよう、皆でまらうのを待ちました」

被災者の体験談を読んで
避難所生活の追体験を!

避難所の運営は、住民たちで行う!

追体験
2

「避難所にいる人たちは、たいてい近所で顔見知り。その中で面倒見の良い方がその場を仕切りました。避難者の人数を数え、毎日名簿を作り、いろんな取り決めを避難先の学校の先生方と相談する。それから避難所の"村長さん"を作ろうという話になりました。配達で大勢の顔を知っているからと、お米屋さんに白羽の矢が立ち、最初は遠慮してたけど、結局最後まで彼がよく世話してくれました」



追体験
3

住民主導で食料も管理

「配給がある避難所はまだいいほうで、公設ではない避難所では1週間たっても何も来なかったらしいです。食料はずっと届くとは限らないから、ペットボトル飲料や缶詰など日持ちのするものは倉庫に残しておくようにしました。学校の先生が倉庫の鍵を持ち、"村長"がフロアごとに班長を決めて必要なものを渡していましたが、"村長"の不在時に、代わりの人が倉庫のものを出したら、厚かましい人たちが全部取って行ってしまった。お年寄りでも「孫に...」と言ってたくさん持っていくのです。一人いくつと決めて順番にとってもらったらよかったのになって、後で戻ってきた"村長"が残念そうに言ってました」



追体験
4

トイレの清掃・管理も自分たちで!

「水が出ないと、すぐトイレが問題になるわけです。朝起きたら、便器の中が山になっている。"村長"は若い人たちにバケツを渡し、学校のプールから何往復も水をくんでもらったんです。水をためたポリタンクとバケツを各フロアに置き、年配者に『トイレの当番、各階で決めてやってね。若い人は水くみするから』と、"村長"が決めてそのように動きました。あと、トイレトーパーは流さずに袋へ捨てる、おしっこは流さない、便をしたら柄杓に2杯流すとか、そんなふうルールを決めて、水を節約しました。それからは皆できれいにするようになりトイレも快適になりました」

赤十字防災セミナーで体験する『災害エスノグラフィー』とは?

今回紹介した体験談は、日赤の各都道府県支部で実施している「赤十字防災セミナー」の「災害エスノグラフィー」というカリキュラムの一部を編集したものです。「赤十字防災セミナー」では、災害の被害や避難生活などを具体的にイメージしながら、災害から命を守る方法を地域密着型で学びます。その中で「災害エスノグラフィー」は、実際に被災された方々の体験談を読み、災害を追体験しながら「自分が被災した場合」をより具体的に考え、地域の仲間と意見交換をすることによって気づきを深めます。

一歩踏み込んで学習することで災害への備えは強固になります。「赤十字防災セミナー」の開催については、お住まいの日赤各都道府県支部までお問い合わせください。



「災害エスノグラフィー」では、災害体験談を読みながら、気づいた内容を分類して3色のマーカーで印をつけます。気づきを視覚化し、仲間と話し合うことで理解を深めます

赤十字防災セミナー
については
日赤ホームページに



TOPICS

第47回フローレンス・ナイチンゲール記章授与式

2019年8月7日 於:東京プリンスホテル

先駆的な取り組みに挑戦する
二人の看護師へ、皇后陛下より
看護師最高の栄誉の記章を授与

8月7日、東京・港区の東京プリンスホテルにて、世界中の看護師にとって最高の栄誉である「フローレンス・ナイチンゲール記章」の授与式が行われました。日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下、名誉副総裁の秋篠宮皇嗣妃殿下、常陸宮妃殿下、寛仁親王妃信子殿下、高円宮妃殿下ご臨席の下、皇后陛下より受章者の日本赤十字社看護師同方会理事長の竹下喜久子さん、マギーズ東京共同代表理事・センター長の秋山正子さんに、記章が授与されました。

「フローレンス・ナイチンゲール記章」は、近代看護を確立したナイチンゲールの功績を記念して1920年に創設された記章です。紛争や災害時の看護活動、公衆衛生や看護教育などに多大な貢献をした世界各国の看護師などの中から、2年に一度、赤十字国際委員会の選考によって受章者が決定されます。日本人の受章者は今回のお二人を含め110人で世界最多。竹下さん、秋山さんのお二人は、この輝かしい記章を、名誉総裁として初めて授与式に臨まれた皇后陛下から、直接、胸にお付けいただきました。

式典の中で日本赤十字社大塚義治社長はお二人の先進的な取り組みと、それがもたらした多くの成果をたたえました。竹下さんは、インドネシア共和国の看護学校への災害看護教育の導入支援、東日本大震災での病院支援、避難所で避難生活を送る高齢者や乳幼児を抱える方への長期ケア活動



が、また、秋山さんは、誰でも気軽に立ち寄れる地域の健康よろず相談室や、がん患者を受け入れる相談センターを開設するなどの取り組みが評価され、今回の受章となりました。受章の感想として、竹下さんは「とても感激しました。共に仕事をし、支えてくださった皆さんと一緒に授与され

た記章だと感じます」と述べました。

また、今回の式典では、長岡赤十字看護専門学校生、諏訪赤十字看護専門学校生によるキャンドルサービスが行われ、会場全体が厳粛な雰囲気になりました。



会場に到着された皇后陛下と、ご案内をする大塚社長



赤十字看護専門学校生によるキャンドルサービス

ナイチンゲール記章 受章者のあゆみ

たけした きくこ
竹下喜久子さん

2004年、インドネシア・スマトラ島沖で発生した地震と津波により壊滅的な被害を受けたインドネシア共和国で、竹下さんは同国アチェ州の看護学校に対し災害看護教育の導入を支援。災害看護の概念のなかった同国で、看護師が自立した救護活動ができるよう尽力しました。

2007年に導入された、日本赤十字社において看護師のキャリア開発の指標となる「キャリア開発ラダー」の整備・導入にも大きく貢献しています。

東日本大震災の際には、日本赤十字社の本社看護部長として、被害の大きかった石巻エリアの医療を一手に担っていた石巻赤十字病院に全国から看護師を派遣。同院の災害医療体制維持に大きく貢献しました。また、日本赤十字社の長い災害救護活動の歴史の中で初めて、避難生活が長引く被災者への生活支援、慢性疾患増悪予防の観点から「看護ケア班」を編成。保健指導や高齢者ケアなど幅広い活動を行いました。

あきやま まさこ
秋山正子さん

25年以上、訪問看護ステーションを運営してきた秋山さん。療養者の尊厳を大切に、本人の希望に沿った看護を実施。患者本人を支える家族にも寄り添い、近隣や友人のネットワークを構築しながら質の高い訪問看護を展開しています。また、「誰でも、予約なしで、無料で気軽に」立ち寄ることのできる「暮らしの保健室」を設立。地域住民が健康について相談できる場を作る活動は、全国に広がりを見せています。さらには、全国のがん患者やその家族への支援活動として、家庭的でくつろげる雰囲気の中、看護師や心理士が相談に乗り、がん患者が生きる力を取り戻すことを目的とした場である英国のマギーズがんケアリングセンターの日本版「マギーズ東京」を開設。同施設には3年間で1万7千人の相談件数がありました。



2020年4月開設予定!

日本赤十字看護大学 さいたま看護学部

赤十字の理念に基づく豊かな人間教育によって、地域に根差して人々の生活を守り、ケアできる看護職者を育てます



約130年の歴史を持つ日赤の看護師養成。“人々の尊厳と権利を守り、看護を通して赤十字の理念である「人道」の実現に向けて努力する人間を育てる”という看護教育の理念に基づき、現在では看護大学6校、看護専門学校15校、短期大学と助産師学校が各1校、年間約1300人の学生を育成しています。

2020年、創設80年余の歴史を持つ「さいたま赤十字看護専門学校」が「日本赤十字看護大学 さいたま看護学部」として生まれ変わります。当学部では、地域社会への貢献により重きをおき、コミュニティーケアを担える人材の育成を目指します。社会がどんなに変化しても、人を救い、人を支えるのは「人」だから。赤十字の人間教育の、新たな一章が始まります。



説明会

さいたま看護学部説明会

9月28日(土)、10月26日(土)、11月24日(日)
第1部 13:00予定 第2部 15:00予定(2部入れ替え制)
会場:大宮キャンパス 埼玉県さいたま市中央区上落合8-7-19

▼詳しくはこちらへ



日本赤十字看護大学
ホームページ

赤井十子さんの ワクワク赤十字体験!

vol.4

手足に障害のある方の義肢と装具を作るお仕事

取材場所

日本赤十字社千葉県支部義肢製作所

1. 型を採る



一番最初に体形に合わせてギプス包帯で、切断部位の型を取り、石膏モデルを製作します

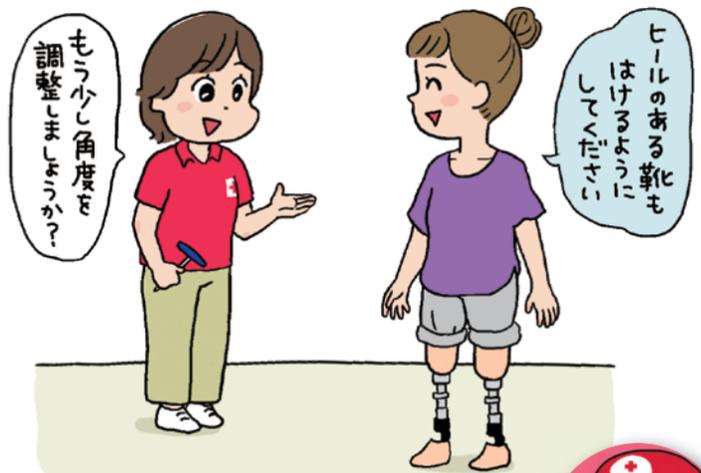
2. 義足を製作する



義肢・装具は、障害の症状に合わせて、一つずつ作ります

義肢の使い心地は、ご本人にしか分かりません。コミュニケーションを円滑に図りながら、お気持ちをくみ取って、微妙な具合を調整していきます

3. 調整・メンテナンス



もう少し角度を調整しましょうか?

ヒールのある靴もはけるようにしてくださいますか?

手足に障害のある方が、末永く快適に暮らせるよう、人生の伴走者となる

「義肢」は、何らかの原因で手足を失われた方が、元の形態や機能を復元するために使用する、義手・義足のこと。「装具」は病後の後遺症などで、手足の機能が低下したり、動きに障害のある方が、その機能障害を軽減し、運動の補助や身体の変形防止を目的に使用する器具のこと。それらの補装具を「義肢装具士」が製作します。

お一人お一人、障害の程度が異なるため、一つとして同じものはなく、完全カスタマイズです。体形の変化、行動の変化から起こる不具合を何度もメンテナンスしていきます。ご事情も性格も違う利用者の心に寄り添うことも大きな仕事のひとつ。初めて製作したときから、ほぼ生涯にわたって利用者を支えるのが、義肢製作所の役割です。



あかいとみこ
赤井十子さん。
困っている人の役に立ちたい40代のママ。1年間のボランティア経験を経て、日本赤十字社の特命職員に!さまざまな活動をわかりやすく体験レポートします。

AREA NEWS

全国各地、あなたの生活のすぐそばで、日本赤十字社の活動は行われています。

福島県

寛仁親王妃信子殿下がご臨席 福島県支部創立130周年大会

7月18日、日赤福島県支部で130周年記念福島県赤十字大会が開催されました。日赤名誉副総裁の寛仁親王妃信子殿下がご臨席のもと、約1500人の関係者が参加し、功労者への表彰などが行われました。ステージでは、いわき市四倉方部赤十字奉仕団委員長の佐藤トミ子さんが、東日本大震災で被災しながらも懸命になって活動した様子を発表しました。



妃殿下は1月に開院したばかりの福島赤十字病院の視察も

新潟県

日本海沖で、高速旅客船が事故に… 日赤救護班が海難事故の実践的訓練

今年3月、新潟沖で高速旅客船と大型海洋生物の衝突事故が発生しました。それを受けて7月24日、救助体制の充実強化を図るため新潟港で高速旅客船の事故対応訓練が実施され、日赤新潟県支部および長岡赤十字病院の救護班が参加。救護班の1人は「実際の場面に即した実践的な訓練で、関係機関との連携を確認できた」と意義を語りました。



巡視艇から船に乗り込み、トリアージの動きを確認する救護員

北海道 全国

北海道胆振東部地震から1年 ～続ける「支援」、広める「教訓」～

7月31日、日赤北海道支部によつ葉乳業から災害救援車「博愛号」1台が寄贈されました。同社の救援車寄贈は1997年から始まり、今回で30台目。北海道支部では災害時に支援物資などを運ぶ災害救援車を累計で265台配備していますが、1年前の地震でもこれらの救援車が活用されました。北海道支部 橋田雄一事務局長は、「迅速な災害救護活動を行うため平時からの備えに引き続き努めたい」と語りました。



「災害への備えは、皆さまの支援で成り立っています。」(橋田次長)



子ども記者は被災地を訪れ、小学校や牧場などで当時の様子取材

千葉県

「見て見て!こんなに取れたよ!」 親子で楽しんだ小児科病棟の夏祭り

8月1日、成田赤十字病院では病院ボランティア会の皆さんにご協力いただき、入院中の子どもたちのために夏祭りを開催しました。子どもたちは手作りのキャラクターお面をつけ、折り紙で作った魚釣りや、ヨーヨー釣り、輪投げやボールを的に当てるゲームなどで一喜一憂。小児科病棟に子どもたちと親御さんの楽しそうな声が響き渡りました。



「心待ちにしていたお祭り。皆、目が輝いていました」と病院職員

群馬県

水や火が無い! 災害食どうする? 高校生の白熱ワークショップ

7月29～31日、日赤群馬県支部のJRCトレセン*で高校生が「状況に合わせた災害時の食」というワークショップを体験。「水の有る・無し」「熱源の有る・無し」など災害フェーズにより条件が異なる中、どんな非常食が考えられるかを班ごとに話し合い、調理実習も体験しました。高校生たちの白熱した議論や実習の様子は地元メディアでも紹介されました。



「知らないといけない。まずは知ることが大事」と参加した高校生 ※リーダーシップ・トレーニング・センター(青少年赤十字の研修)

長野県

子ども記者が鋭い視点で取材! 「戦時中の看護婦」について学ぶ

7月27日、信濃毎日新聞の子ども記者クラブのメンバーが長野県赤十字歴史資料館を取材に訪れました。戦時中に日赤の長野支部救護看護婦養成所へ通っていた方や被害の大きかった長野空襲を経験された方の話に真剣に耳を傾け、取材メモを取り、新聞記事を作成した子ども記者たち。取材後、彼らは「少しでも争いをなくすよう自分たちががんばりたい」と語りました。



彼らの作った記事が、終戦の月に平和を考えるきっかけになった

愛知県

猛威を振るった伊勢湾台風から60年 貴重な写真で振り返るパネル展を開催

1959年9月26日に上陸した伊勢湾台風は、台風災害として明治以降最多の死者・行方不明者数5098人という被害をもたらしました。それから60年となる今年、日赤愛知県支部では伊勢湾台風での赤十字活動を振り返る展示パネルを製作。当時の様子が鮮明に伝わる貴重な写真9点を愛知県内のさまざまな場所で展示し、防災減災の啓発に役立てています。



船による救護活動。パネル展の開催場所・日程はホームページで公開中



詳細は愛知県支部のホームページ

京都府

見守る保護者も思わず夢中に! 医療体験キッズセミナーを開催

7月20日、「京都第一赤十字病院フェスティバル 医療体験キッズセミナー」が開催され、5回目となった今年は小学校5・6年生の児童81人が参加しました。本物の医療器具を使い、腹腔鏡や内視鏡などの手術体験や看護体験、また、VRによる手術トレーニングなど、盛りだくさんのプログラムに児童は熱中、保護者からも大好評を博しました。



参加者の約半数が「医師や看護師になりたい」と評価

東京都

東京五輪の開催まであと1年 前回パラ大会のボランティアが経験語る

8月5日、日赤本社では1964年の東京パラリンピックでボランティア活動を行った赤十字通訳奉仕団(当時)のメンバー3人によるトークイベントを開催。当時の選手村の様子や実体験を語り、「何か私にできることはありませんか、という一言で必ず新しい世界が開けます」と、学生や次のパラリンピックでボランティアを予定している方々に向けてエールを送りました。



トークショーの後、パネル展の会場で登壇者の話に聞き入る学生

present プレゼント

「平成の災害と赤十字」展 特別図録 未来に活かす (非売品)



2・3月に日赤本社で開催された企画展「平成の災害と赤十字～語り継ぐ 過去から学び、未来に活かす～」の展示内容をまとめた特別図録「未来に活かす」をプレゼントします。

希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。
①お名前(匿名をご希望の方は、その旨ご記入ください)
②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
⑤赤十字NEWS 9月号を手に入れた場所 (例/献血ルーム)
⑥9月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか?(いくつでも)
A.表紙 B.大災害で被災したら...
C.第47回フローレンス・ナイチンゲール記章授与式
D.日本赤十字看護大学 さいたま看護学部開設
E.ワクワク赤十字体験! F.エリアニュース
G.健康豆知識 H.プレゼント
I.ワールドニュース J.1枚の写真から
⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他 Voice(読者の声)への投稿もお待ちしております。

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 9月号プレゼント係
FAX / 03-6679-0785 メール/ kaho@jrc.or.jp (件名「赤十字NEWS 9月号プレゼント係」)
9月30日(月)必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

日赤のドクター&ナースが教える 知って良かった! 健康豆知識



天候の変化で体調が悪化...「気象病」を予防するには? file. 59

日本赤十字社和歌山医療センター 漢方内科 部長 山田 伸(やまだ しん) 和歌山県和歌山市小松原通四丁目 20 番地 TEL: 073-422-4171

た体の変化を経る女性に比較的多いとされています。気象病の予防には、心と体にストレスをためず、規則正しい生活と適度な運動、そして十分な睡眠といった自律神経を整える生活を心がけることが有効です。入浴は、しっかりと湯船に漬かって血行を良くするとともに、入浴の1時間後に就眠すると寝つきも良くなります。また、冷たい飲食物は消化にエネルギーがかり過ぎるため、取り過ぎないことが大切です。

それでも症状が出てしまうときには、「五苓散」という漢方薬を処方します。吐き止めの効果のある「五苓散」は、症状が出る予感がするタイミングで服用すると効果的です。特に低気圧が近づいている日に出外する際は、忘れず持ち歩くことをお勧めします。



症状が出はじめたら、安静を心掛けましょう

赤十字の活動に「寄付」で参加できます!

あなたの寄付でできること



安眠セット(1人分) 2000円 緊急セット(1世帯4人分) 3000円

日本赤十字社は災害発生後、救援物資をすぐに被災者の方に届けられるよう、日頃からたくさんの方の毛布や安眠セット、緊急セットを備蓄しています。



◀ご支援はこちらから

日本赤十字社への寄付は 税制上の優遇措置が受けられます。

赤十字NEWSは日本赤十字社のさまざまな活動について最新の情報を交え皆様にお伝えします。このような赤十字の活動の多くは、皆さまからの会費や寄付によって支えられています。寄付という形で参加することで、あなたの気持ちを誰かのために役立てることができます。活動資金へのご協力をよろしくお願い致します。

WORLD NEWS

バングラデシュ南部避難民



手洗いの指導法を地元看護師へ伝える清水看護師

バングラデシュ南部の避難民キャンプで日赤が建設を進める新しい診療所

2017年8月からキャンプでの生活を余儀なくされているバングラデシュ南部避難民たち。2年もの間、支援を続けてきた日赤の活動と現地の現状をレポートします。

※国際赤十字では、政治的・民族的背景および避難されている方々の多様性に配慮し、「ロヒンギャ」という表現をしないこととしています。

サイクロンなどの災害に備えて診療所の建て替えに着手

日本赤十字社はバングラデシュ南部避難民を支援するため、2017年から医療チームを派遣し、現地の医療スタッフやボランティアとともに巡回診療や仮設診療所を拠点とした医療活動などに取り組んできました。現在、避難民キャンプで暮らしている人々はおよそ90万人。今もなお先行きの見えない中で、これからも中長期的なサポートが必要な情勢となっています。

今年6月、日赤は新たな支援活動をスタート。それは、仮設診療所の建て替え工事です。もともとあった仮設診療所はサイクロンや大雨に耐えられるものではなく、プロジェクトマネージャーとして現地入りしている清水宏子看護師(名古屋第二赤十字病院)は「竹とビニールのテントで雨風をしのぎ、雨期には土台が崩れそうでした」と語ります。周辺は、雨が降ると泥水

が道いっばいに流れ込むことも多く、脆弱な地盤のため地滑りの危険もある土地。建設中の新しい診療所は、しっかりと固めた土台の上にプレハブ造りの建物が建つ予定です。

現地の人々が植える苗木とともに“私たちの診療所”へ成長

新しい診療所の敷地内では、土砂災害を防ぐ役割を期待して、下草や苗木を植える作業が進められています。「以前ははげ山だった避難民キャンプ全体に、木々が生き茂ってきた」と清水看護師。現地スタッフたちは「診療所が完成したら、それぞれが好きな苗木を1本ずつ植えて“私の木”として大切に育てたいね」と夢を語っています。

診療所はこれまで日赤が運営してきましたが、「今後は現地の医師や看護師たちに診療所を受け渡していかななくては」と力を込める清水看護師。現地の人々が“私の木”を育て

る新しい診療所は、本当の意味で“私たちの診療所”へと変わっていくのです。

建設工事中は近隣の仮設診療所で診療を継続していますが、再開を求める声も多く、人々に求められている診療所であることを痛感している日赤チーム。避難民の支えとなる新しい診療所は、まもなく完成予定です。



外観が出来上がりつつある診療所(2019年8月撮影)



© ICRC



諦めかけていた夢を取り戻したタンザニアの少年

アスリートになることが夢だった9歳のムッサ・フセインくんは、交通事故で左脚を失いました。タンザニアでは、障害者用の人工装具やリハビリサービスが提供されるのはごく一部。ムッサくんは赤十字国際委員会(ICRC)が企画する障害のある子どもたちの支援プログラムに参加する機会を得て、スポーツ用の義足を作ってもらい、訓練を受けることができました。自分に合った義足を装着し、正しいリハビリを受けたことで、一度は諦めた夢をさらなる大きな目標に変えたのです。それは、タンザニアを代表するパラリンピック選手になること。「少しも時間を無駄にしたくないんだ」と、ムッサくんは義足を装着するやいなや駆け出しました。

スポーツ用義足を作ってもらい、その感触を確かめるムッサくん